

一般社団法人 埼玉私保連



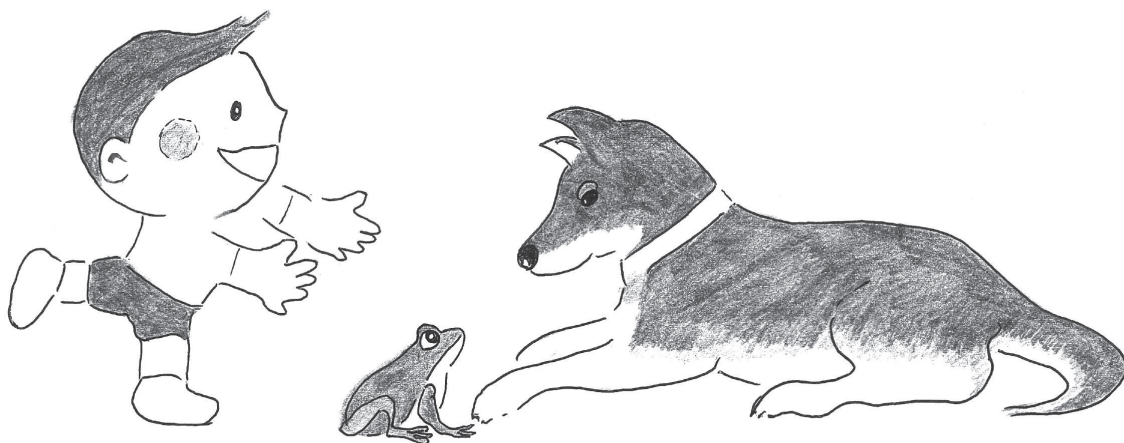
広報

No.157

R6.3月

発行

はじめましての春です



乳幼児との「適切な」関わりとは
「子どもの発達を考える」

♪ 子どもとうたおう ♪

Saitamaken Siritu Hoikuen Renmei

埼玉県私立保育園連盟

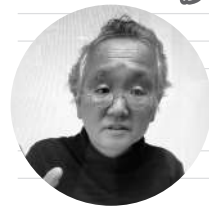
第2回研修会報告

日時 2024年2月2日(金) 13:30~15:30 0.1歳ト研修

テーマ

乳幼児との「適切な」関わりとは、
具体的にどんなもの？

講師 掛札逸美氏 (心理士) 参加人数 110名



掛札逸美先生は、ダナ・サスキンド医師著の『3000万語の格差…赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話しかけ』と『ペアレント・ネイション…親と保育者だけに子育てを押しつけない社会のつくりかた』を訳した方です。今回は、科学的な根拠に基づいた未就学児保育・教育と適切な関わりについてお話しいただきました。

まず、「子どもは小さな大人ではない」、赤ちゃんは人間である前に生きものである。生まれた瞬間から脳はすさまじい速度で成長しており、子どもが持つて生まれた能力を最大限に育てるために、まず生物として必要なことがその子の求める形で充足されることが不可欠であると、話がありました。

日本の教育は就学未満児の成長発達を小学校にあがるための幼児教育、そのための乳児期として進めてきた。そこに脳科学や人間発達学の知見を随時入れてこなかったと述べ、脳科学と発達学の観点から子どもの発達についてお話しになりました。

■生後すぐから(自分と周囲(世界)に対する信用感づくりの過程)
赤ちゃんは言葉を持たないので、

何を伝えたいかもわからず、どう伝えればいいのかもわからない。だから泣く。たとえば、「おなかすいたのかな?」「ミルクかな」という声が聞こえ、ミルクが口に入り、泣いていた理由が解消するという体験の繰り返しで、「発信すれば解決する」という自分自身の感覚への信用が育ち、解決してくれる存在への信用が育つ。生物として必要なこと、その子の求めることに大人が応えることで信頼関係が育ち、言葉の獲得にもつながる。

泣いても誰も応えず、解決されず、逆に、おなかですいていないのにミルクを飲まされ、おむつが汚れて泣いてもきれいにしてもえなかったら、自分の感覚に対して根本的な信用が育たない。自分の感覚にも言葉が一致せず、認識や言葉が育たない。自分の発信に優しく応答してくれるおとなの存在により、子どもは、自分の感覚が周囲のおとなに理解され、応答されて、適時に適切な対応されることで、自分自身と自分の周囲を信用に値するものと認識する。また泣いて知らせよう、こう泣けばミルクがきておなか一杯になる、お尻が気持ちよくなる、その経験から主体の感覚が育つ。

子どもが泣くことは、主体として世界に働きかけていること。これに覚えてもらうことで主体としての感覚が育ち、応える世界に信用が育ち、アタッチメントが育つ。応えが返ってこず、おとなの都合で動かされれば、主体の感覚は育たない。

■赤ちゃんは、周囲のおとなの声のトーンを理解している

周囲のおとなの声が怒っている、きついというのは、生後4~5ヵ月でも脳がわかり、赤ちゃんもストレスを感じる。ストレス・ホルモン(コルチゾール)が出続けると脳にも身体の成長にも悪影響である。暴力やネグレクト以前に、おとなは子どもに対して優しくかわることが不可欠である。

■自己を認識し始めるのは生後6~9ヵ月

自分の主体の感覚が育ち、「自分」がはっきりして初めて「他者」という認識が生まれる。「他者」という自分とは分かれた存在を認識始めるのは1歳以降。1歳でもまだ、おとなが言う「友だち」という感覚はない。2歳頃になると「他人」という存在はわかるが、他人の気持ちはまだわからない。「心の理論」をまだ持たない。当然、集団行動、一律行動はできない。できないことをおとなの価値観でやらせようとしてもやらない、できないのでおとなはいらだつ。子どもは泣いたり反発したりするので、保育士がさらにいらだち、悪循環になる。

■未就学児は「気質」であって「性格」ではない
未就学児は「気質」、つまり、遺

伝子で受け継いだもので動いている人たち。たとえば、「気難しい気質」は、おとなが考える「気難しい人(性格)」とは違う。気質は一貫しており、パターンで理解できる。大人がその子の気質を理解し、気質に合った対応をすれば、子どもはおとなを信用していく。「この子は気難しいから」と無視していれば、その子は周囲に対する信用を育てにくく、それが「性格」につながっていく。

■1歳、2歳のかみつき、ひっかき対応

1歳、2歳の子に「お友だちをかんだでめしよ」と言っても理解できない。かみつきは、子どもの気質を理解すれば対応できる。噛まれる子には「目の前に何か動いていたパツと手を出す」「近づいていく」パターンが見られ、噛む子は「目の前に何か近づいてきたらパツと噛む」というパターン。これはイヌやネコに見られる個体差同様、気質によるもの。

かみつきやひっかきを記録し、パターンを知ることでも子どもの気質がわかる。その気質(行動パターン)に合った対応ができる。保護者にも子どもの行動を具体的に示すことができ、理解を得やすい。「保育の安全」サイトの「コミュニケーション」のA-5にあるエクセルにデータを数ヵ月入力すれば、掛札先生が分析してくださることです。

■2歳前後の「いや!」の理由

「いや」「やめて」「いや!」これは自我の発達過程であり「自分」と「他者」の線引きを明確にしたい練習をしているところ。「○○をしたい」「○○が好き」は、知識や

経験が増えなければ言えないが、「いや」「いや」「いや」はこの時期でも十分言える。「いや」「やめて」は、世界に働きかける主体としての力が育っている姿であり、「いやなこと」はイヤという「自分を表現する」基礎が育つ。

■**幼児になっても自分が世界の中心**
「貸して」「いいよ」を決まりのように教えるのではなく、その時の自分の感情に基づいて言えるようになることが大事。主体としての主張と交渉の第一歩である。

例…叩かれた子には「痛いからやめて」「たたかないで」と言ってみよう。叩いた子には「おもちゃ壊されたくなかったんだね。でも、叩くのはルール違反だよ。『壊さないで』って言うおう」。

例…「みんなは何をしているのかな」「今は何をする時間かな」「給食を残したら調理の先生がどう思うかな」など、「他人の目」「他人の評価」「みんなと一緒」「空気を読む」を使って間接的に命令していいか？

例…「欲張らないで、貸してあげて」ではなく、この時期は、欲張って欲しいだけ全部抱える充足感を味わうことが不可欠。

■**未就学児期は「やってみたい」「楽しい」をどれだけ経験するかが大事**
子どもならではの好奇心は、10歳前後以降急速に弱まるのがわかっていて、未就学児期に好奇心や動機をいかに伸ばせるかが、将来につながる。この時期の「〇〇ちゃんはいくができない」「ヘタ」といったおとなの言葉は、子どもの「やってみたい」「できる」「自分が一番！」を破壊しかねない。

■**言葉を持たないと考えることはできない**

考えるためには、言葉という道具が必要。言葉を持たなければ考えることはできない。たとえば、自分で自分の感情をとらえ、まず自分に対して言語化し、自分で自分を落ち着かせることができるようになることが、感情制御のスキル発達。道具である言葉を子どもに与えていくのは、周囲のおとなの仕事。

例…デザートに先に食べたがる子に、「やさしく冷静に」デザートを先に食べちゃうと後でなくなっちゃうよ」「食べる！」「後で、ないよ」「いい。先に食べたい」。子どもが後で「デザート！」と言っても、冷静にやさしく「最初に言ったよね。デザートを先に食べると、後はないんだよ」と繰り返す。「デザートを先に食べると、後にはない」という言葉をその子の脳にあげている。これを繰り返すうちに、子どもは「デザートを先に食べると、後にはない」と自分で自分に言うことができるようになり、先には食べなくなるか、自分で考えて「じゃあ、先に半分だけ食べる！」「と言うようになる。これが、自分で考えて、自分でする感情制御の萌芽。

■**大人にとって不都合なことが多い子どもを「課題のある子」と決めつけない**

まず、おとなの価値観で、「みんなと一緒に」「おとなの言う通りに」を求めるから「課題」も増える。「キレる」「グレイゾーン」と言われる子は、自分がなにを感じているかを伝える言葉を得られていないため、言葉で自分の感じていることをつかむことができず、伝えることもできず、行動に出る。

今、一番の問題は保護者が子どもとやりとりをしていないことと考えられ、そこには、過去10年間で急速に普及したスマホの影響があるのでないか。かつて、「テレビに子守をさせないで」と言っていたが、テレビはまだ共同注視（共同注意）の世界だった。スマホは共同注視ができず、子どもが主体としてかわり、自分の感覚がおとなに理解され応答されていくことで育てていく言葉の獲得時期の質が下がっている。

■**性別、容姿、年齢、国籍、人種や民族、母語、性的指向等で人を分けることは間違っていると、子どもにも伝えなければならぬ**

「適切な保育」はおとなの言葉狩りをするものではない。だが、上のようなことはすべて、差別と偏見につながる。今の子どもたちは世界の中で生きていく人たちのなかから、差別や偏見の芽を植えつけてはいけない。他の先進国の職場で上のようなことを同僚や部下に言ったら、それがほめ言葉のつもりであっても仕事を失いかねないことを日本の大人も知っておくべき。

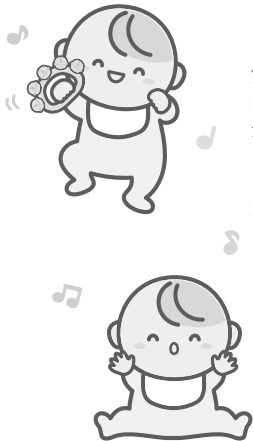
■**大人が言葉を具体的に使うことで、やりとり（かかわり）の質が変わる（『3000万語の格差』の5章を参照）**

その子がしている行動、言っている言葉、表現していることに応える時は具体的な言葉を使う。
例…「さあ、言葉（これ、それ、あれ、どれ）を使わず、名詞や動詞、形容詞を言う↓「それ、取って」ではなく、「青い袋を取って」。「しょうずだね」↓あいまいな誉め言

葉でなく、具体的に記述する。「それはキリン？首が長いんだね。隣にいるのはなにかな？」
「さすが男の子。車が好きなんだね」「女の子なのに車が好きなんだ！」↓性別でまとめた言葉は使わない。「〇〇ちゃん、車が好きなんだ。最近、かっこいいと思った車はなに？」と。

■**研修を終えて**

冒頭の「子どもは小さな大人ではない、赤ちゃんは人間である前に生きものである。生まれた瞬間から脳はすさまじい速度で成長している子どもがその能力を最大限に育つために、生物として必要なことがその子の求める形で充足されることが不可欠である」とのお話から、今までにない衝撃を感じ、話に引き込まれた。「不適切保育」と言われ、「これをやってはだめ」「これを言ったら虐待？」など振り回されていたが、「大人の感覚が正しい。そこにうまく乗ってくれない」というその感覚こそが違っていたのだと思いました。改めて、主体として生きる子どもがおとなのかかわり、応答のなかで育つ過程を知ることができました。また、言葉の獲得の中でおとなが伝える言葉自体が貧弱になっていくことも実感しました。今回の掛札逸美先生の「乳幼児との適切な関わり」こそが「適切」なのだと思ふことが出来ました。



【 春 が 来 た 】

高野辰之 作詞
岡野貞一 作曲



1. は る が き た は る が き た ど こ に き た



や ま に き た さ と に き た の に も き た



月
子
ど
も
ど
う
た
お
う
月

自然のあちらこちらから春の訪れを感じる季節になりました。新年度になり、先生方も園児たちも新たな気持ちでこの4月を迎えたことと思います。今回は春の歌と学校に関わる歌をご紹介します。

♪ 歌詞のポイント

この曲の歌詞は、すべて5文字のまとまりでできています。「はるがきた、はるがきた、どこにきた、やまにきた、さとにきた、のにもきた」このように子どもでもわかりやすく、覚えやすい歌詞ですね。前半4小節「春が来た、春が来た、どこにきた」は、どこにきたのだろう？と最後に問いかけを感じさせるようになっていきます。それに対して後半4小節の「山にきた、里にきた、野にも来た」は問いに対して答えていますね。この前半と後半を2つのグループで歌い分けるのも良いでしょう。

また「春が来た」と朗読する時は「きた」と下がりますが、音では「きた」(ソド)と上がっています。何も意識しないで歌うと語尾の「た」が強くなってしまうので、「きた」の「き」をはっきり発音するように心がけましょう。日本語のイントネーションを

大切に、美しい日本語で読んでから歌うようにしてください。子どもたちは頭の中に情景を思い浮かべやすくなり、それが豊かな感性に繋がっていくと思います。

♪ メロディーのポイント

歌い出しの2回繰り返し返される「春が来た」は、1回目「ソミファソド」が2回目は「ソミファソド」と最後の音が上がっています。春が来た喜びが増しているようですね。「どこに来た」は語尾に？を感じて歌うと良いでしょう。そして「山に来た」(ソラソミソ)から「里に来た」(ドレドラド)と音が上昇して、最後に「野にも来た」(ソミレソド)でこの曲に出てくる最高音の高いミの音が使われています。曲の山がここにあることがわかりますね。山、里、野のそれぞれ場所の春を想像しながら歌いましょう。子どもたちが春を感じる花や植物、鳥の声などを思い浮かべられるように先生方が問いかけをしてください。まずは先生方が自分なりの春のイメージをしつかり持って、子どもたちと会話をしていくと、とても素敵な歌になると思います。

【 めだかの学校 】

茶木 滋 作詞
中田 喜直 作曲

♩ = 108

めだかの がっこうは かわの な か

そつとのぞいて みてごらん そつとのぞいて

みてごらん みんなでおゆうぎ しているよ

♪ 歌詞のポイント

この曲の歌詞は3番までありますが、それぞれ情景がすぐに浮かぶような歌詞ですね。1番の「そつとのぞいてみてごらん」は、めだかをびっくりさせないように音を立てずに川の中を覗き込むような感じで、優しく丁寧に歌いましょう。「そ（S）」のSの部分に時間をかけて発音すると、その雰囲気が出ます。2番の「みんなで元気に遊んでる」は活動的な様子が想像できますね。1番の「静」に対して2番は「動」。先生方と園児たちが同じ輪の中で動きながら歌って、めだか達が元氣よく遊んでいる表現を楽しむのも良いと思います。3番の「嬉しそう」は、まず先生方が可愛い子どもたちを見て嬉しそうに微笑みながら歌ってくださいね。先生も生徒もみんな仲良しで、川の中で気持ちよく過ごしている様子が伝わるでしょう。「水に流れてつーいつい」は、まっすぐにめだか達が泳いでいく様子が表れていますね。実際にめだかになったつもりで、まっすぐに泳ぐジェスチャーをしながらリズムに合わせて歌うと楽しいでしょう。幼児期の歌に身体

表現はとても有効だと思います。体が動けば自然に心も動いてきますね。

♪ メロディーのポイント

「そつとのぞいてみてごらん」の部分は、2回同じ歌詞が使われていてメロディーも同じですね。ここでは2回目をエコーのようにして強弱を工夫しましょう。楽譜にもあるように、1回目を強めにして2回目は弱めに歌うと効果的です。ここで全体を2つのグループに分けて、1回目と2回目のメロディーを分担して歌うのも効果的だと思います。そして最初のフレーズ「めだかの学校は」と最後のフレーズ「みんなで」は、全員で声をそろえて楽しく歌いましょう。

筆者プロフィール 佐藤ユカリ

武蔵野音楽大学音楽学科卒業。オペラ「ラ・ファヴォリタ」「修道女アンジェリカ」「魔笛」に出演。東京板橋の声楽団体「グルッポミノリート」に所属し、コンサート活動を行う。深谷カルチャー教室音楽講師。深谷市音楽連絡協議会会員。元中学校音楽教師。

研修会「こどもの発達を考える」

「子どもの脳とこころの育ちをどう考え保育するか？」

令和6年4月15日 埼玉会館

京都大学大学院教育学研究科教授
全国私立保育園連盟理事

明和 政子氏



はじめに、「脳とこころの研究を専門としている科学者です。」という自己紹介の後、人の育ちをサポートしていく上で保育と科学がどのように関係性を持っているかを熱く丁寧語に語ってくださいました。

◆生成AIとヒトの違い

次世代の幸せを目的に科学があることを前提に、政府によって2016年に提唱されたソサエティ5.0は、仮想空間と現実空間の境目を取り払っていかうとする取組みについての説明から、本来ならば10数年をかけて進むところだったものが、コロナ禍により急激に進み、話題の「チャットGPT」の誕生となりました。

生成AIは、実際に使ってみるとすごく便利であり、調べるだけでなく考えてくれるので、人間を超えた？と認識される存在と取り沙汰されています。完成された脳を持つ大人と、成長発達途中の脳を持つ子どもがICT機材を使用する時、そ

の影響や使用法に違いがあることは想像ができます。

検索することや「いいね」が多くなることで学んでいる生成AIです。自らの身体を使い経験を通して学び、1人1人「いいね」と思うものが違って、飽きることから学びを深め、学びを共有しながら大人から褒められることで学びが進むのがヒトです。

このようにヒトと生成AIとの学びの違いを分かりやすく説明してくださいました。

◆乳児期のアタッチメント形成

ヒトは環境（物・人など）から影響を受けながら、長い時間（約25年）をかけて脳を発達させる生物で、ヒトとの関わりの中で育まれていきます。

社会的環境の中、他者との身体接触なしには生存できないヒトには、生きていく根幹にアタッチメント（社会的絆）の形成が必要とのことでした。乳幼児期に抱かれ、あやされ、身の回りのお世話をしてもらう際の特

定な誰かの言葉かけやその表情、そして心持ちなど、自分の心情を状況中継でもするかのように代弁してくれる誰かを感じ、人間らしく育っていきます。

ヒトの「最低限の自己（self）」を形成する要素は、外受容感覚（視・聴・味・嗅・触覚）、五感と自己受容感覚（運動感覚・前庭器官の平衡感覚）と内受容感覚（内臓感覚）の3つです。人と触れ合うことから、感覚を予測し、自らの脳で誤差修正を繰り返して、前記の3つの要素が脳内で統合されていき、脳内マップが形成されるということでした。（脳内マップが崩れている状態が統合失調症）

ヒトにとって、アタッチメント（愛着関係）をなす他者は「心地よさ」をもたらししてくれる存在として記憶され、徐々に他者と円滑に関係を築いていくため



の土台が出来上がっていきます。この特定の誰かは、必ずしも母親や血縁者である必要はないこと、複数あってよいことを、明和先生ご自身の育児体験を交えながらお話くださいました。

また、共同養育を行ってきたヒトは、アタッチメントの形成にある特定の誰かのみとしか行ってきた場合、思春期に崩れるおそれがあるそうです。これは土台がないためと断言されていました。

身体の健康が土台、脳と心の発達を守ること、食生活習慣（食育）を核とした環境を保障することが乳児期の養育において、とても大切なのだそうです。生涯の健康や生活水準を研究したデータが、幼児期の養育環境はヒトの生涯に大きな影響を与えていることを指し示しています。

◆教育を脳科学から考える

「非認知機能」は経済学者が命名したもので、脳科学から考えると、集中ネットワーク（収束的思考）ON状態・ぼーっとネットワーク（拡散的思考）OFF状態、この2つのバランスをとり、共存できる状態を保つためにギアの切替えを担っている気付きネットワーク、このネットワークの関係があることで一人一人違う思考が出てくるのだと定義されていました。



日本の教育では、常に集中ネットワーク（ON状態）が求められています。しかし、多くの場合、ぼーっとネットワーク（OFF状態）にひらめきが湧くというデータがあるそうです。余談ですが、ノーベル賞に輝いた京都大学の山中教授、学内を走っている姿をよく見かけますと楽しそうに教えてくださいます。

次世代に必要なとされる人らしさを支える知性、心の問題や脳の発達を考えられていないのが日本の現状ですとのことでした。保育・教育では、利便化して良いものと、利便化してはならないものがあり、現実空間で「心地よい感情」を育むためにも科学者と保育者の協働は不可欠ですと声高に話してくださいました。AIは外受容感覚に偏った情報処理が行われるため「心地よくない感情」ばかりが育ってしまうおそれがあるとの

ことでした。

親になるための教育は、出産前の思春期頃からがよいそうです。親として必要な脳と心（親性）を育んでいくのによいとされているとのこと。ヒトが生まれて間もない時期は、脳が環境の影響を特に強く受けやすいため、集中的に育むことが必要。そのため「産休・育休」を有効活用してほしい。この時期の環境経験は、その後の脳と心の発達に直接的に影響を及ぼしていくため、乳児期の環境保障を欠いてはならず、これがその後の成長における精神疾患予防や病気になるにくい身体を手に入れるための土台作りの時期になるとのことでした。

◆食育科学と腸内環境

こどもの脳と心の発達には食育科学も深く関係しているそうです。「こどもを守るのであれば食習慣をしつかりと身につけることを考えるとよい。」との言葉は心に響きました。保育園を利用している子どもの食環境に憂いを感じていたため、尚更でした。腸内細菌を整えることは、身体疾患や精神状況をケアすることにも繋がっていて、人の幸せ感覚や心の安定を司るホルモン（セロトニン・ドーパミン）は、その大半を腸で作られているのだと知ることができま

した。また、私たちの身体は毎日食べる食べ物で作られています。だからこそ、日々の食事が大事、日本古来の食べ物に目を向け、日本人に合った腸活を子育て世代の保護者の方々に広く知ってもらいたいと思いました。大便秘結という初めて聞く言葉もありました。欧米では健康な人の大便秘結をろ過し、腸内環境を整えるために移植が行われている例もあるそうです。腸内環境を変化させることで発達障害を防ぐことができるのお話もありました。人の身体を科学し、様々なデータを分析していくことで、気になるこどもが増え続けている謎が解けるかもしれないと感じました。

◆ドラえもんとのび太

「私ね、ドラえもん、大好きなのですよ」と明和先生が唐突に話しました。

ドラえもんは好物のどら焼きを食べる未来から来たネコ型ロボット、ロボットだけど内臓感覚を持つているので人間的な思考ができるのですよ。のび太は一人では何にもできないドラえもんに頼りっぱなしの子、これでいいのかと思うけど、他人に助けを求められますね。助けを求められることは素敵なこと。現在は、できない人が意外に多い。ドラえもんのようなロボ

ットがあるといいですね。と、ほほ笑んでいらつしやいました。将来、日本の国民が幸せであるために、ヒトという生物の育ちの本質を科学的に理解すること、心の問題・脳の発達・腸内環境など、ヒトが人として存在するために見逃してはならない大切なことを学ぶ事ができました。参加者の皆さんも、熱心に先生の声に耳を傾けており、質疑応答でも盛んなやり取りがありました。

「保育はサービースではない。子どもの土台をしつかりと育てられる場所が保育園だ。」というメッセージをいただきました。この言葉を支えに明日からの保育を楽しんでいきたいと思える研修会でした。



事務局（一社）埼玉県私立保育園連盟
〒363-0015 桶川市南2-7-13 桶川中央マンション2F
TEL 048(772)8623 FAX 048(772)8635

〔全私保連推奨〕各種団体保険制度



有限会社ゼンポ



公益社団法人
全国私立保育連盟



東京海上日動

ほいくのほけん・こどもえんのほけん

保育施設向け 4月1日～1年間（中途加入可能）

「園賠償責任保険（新型コロナウイルス等対応費用補償特約付帯）」
「園児団体傷害保険（学校契約団体傷害保険）」など、保育施設に
おける最大リスクを補償する1番の主力保険制度です。

やくいんのほけん

社会福祉法人向け 8月1日～1年間（中途加入可能）

Web
加入
可能

社会福祉法人の役員の業務遂行に関する賠償リスクやマスコミ対応費
用等のレピュテーションリスクに加えて、雇用関連トラブルによる法人
への賠償リスクもオプション付帯可能な保険制度です。

えんじのほけん

在園児向け商品 4月1日～自動更新（中途加入可能）

Web
加入
可能

「国内外問わず24時間お子さまをお守りする傷害保険」「扶養者に万が一
の場合の育児費用補償」など手厚い補償内容に加え、一般的な保険商品
と比較して約65%の割引となっているため非常に割安な保険制度です。

しょうがくせいほけん

卒園児向け商品 4月1日～自動更新（中途加入可能）

Web
加入
可能

24時間のおケガ等からお守りに加えて、自転車条例で義務化されて
いる個人賠償責任保険など卒園後のリスクを補償します。本商品も一般的
な保険商品と比較して約30%の割引となっているため割安な保険制度です。

取扱
代理店

有限会社ゼンポ

TEL: 03-3865-3881
FAX: 03-3865-2806



引受
保険会社

東京海上日動火災保険株式会社

担当課支社：公務二部 文教公務室 TEL: 03-3515-4134

このチラシは、このご案内は施設賠償責任保険・生計賠償責任保険・学校契約団体傷害保険特約付帯傷害保険・社会役員賠償責任保険・レピュテーション費用保険（レピュテーション費用特約条項付）費用・利益保険・雇用関連賠償責任保険の概要・団体総合生活保険（傷害保険）の概要についてご紹介したものであり、全ての事項を記載しているものではありません。保険の内容は各保険制度のパンフレットをご覧ください。また、ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。詳細は契約者である公益社団法人全国私立保育連盟にお話しする保険約款によりますが、ご不明点がありましたら、取扱代理店または保険会社までお問い合わせください。

連絡先



公益社団法人全国私立保育連盟指定 東京海上日動火災保険株式会社代理店

有限会社ゼンポ

TEL 03-3865-3881
FAX 03-3865-2806

〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10 全国保育会館4階

子どもの育ちが見えれば、明日の保育がもっと豊かに！

全国私立保育連盟推奨（総代理店）

導入費用
無料

きっずノート

「きっずノート」は、文字だけでは
伝えきれない園での豊かな活動、
子どもたちが自ら学び・育つ姿を
「見える化」するアプリです。

保育者の
業務
省力化

子どもの
学び・育ちの
見える化

緊急時の
連絡手段

正式利用お申込みの全施設

最大9ヵ月

利用料無料！

契約更新後も料金そのまま！

利用しやすい価格に
なりました！

年間一括利用料6万円

ひと月
あたり **5,000** 円（税別）

※ただし、事業者利用規約の定めにより、将来において利用料金が変更になる可能性はございます。

詳しくはお問い合わせください。

<担当者：菅沼、佐藤>